大赤見について

赤見は古来、人家の多少によって大赤見・小赤見と二郷に分かれていた。

赤見の名は、赤見國玉神社の祭神である仁賢天皇の皇女の赤見皇女の御名に由来する。文和二年（１３５３年）の三宝院文書には赤見村、室町時代応永六年（１３９９年）の三宝院文書には赤美保とある。

文禄四年（１５９５年)、豊臣秀吉より赤見村のうち百五十五石五升を千秋七郎に与え、百三十九石九斗五升を伊勢の願證寺に与え、朱印状を発行している。

小赤見は鎌倉時代の醍醐三宝院文書に既に小赤見とあるから、小赤見に相対し赤見村はそれでは大赤見と呼ぼうということになったらしい。

それからずっと世は下って昭和十一年十月十六日、大赤見は東大赤見・西大赤見・若年と三大字に分裂した。

山口伊三郎・山口周一著「若年今昔記」より